

汲古一心

『狂雲子の書』(一)

中村素堂

だいぶ前の話、東京都も山の手と下町の境になるような芝、すなわち昨今の港区という辺りに、実に人柄のよい主人が経営している古書画の店があった。

人好きの上に何もかもあけっぴろげの明るい主人だから、自然何とはなく立ち寄って茶を啜り、世間ばなしのひとつもして、ついでにそこいらに掛けてある書画など評したりして、結構商いになっていく。まあ会費のいらぬクラブみたいな形で、もの識り、通人、はんか通人、その他知識層に属する中年以上の人々の手のすいた時に集まる楽しい会所のような所だから、話しているうちに勉強にもなったり、また世間のおもしろさにもふれることが多いというものだ。

明の染つけの据はりのよい小壺がある。手にとつて裏の銘など見る。実はそれとなくお値段を調べるんだ。「へエー、この壺はこんなにするもんですか」と驚く。「品がバカに良いので少し高く買つてしまつたんですが、マアお持ち下さるなら五分ばかりはお引きいたします」なんていう。ついに無理して買つてしまふ。

あとでその売り主がわかつて元値がバレると、大分儲けているこ

とになつてゐる。人の悪いのが「随分いい儲けになる時もあるんでしょうね」とそれとなく野次る——と主人明るく笑つて、「何といつても手前どものような店へ見える方々は、その日のお暮らしに困るといふのはありません。ふところも温いので何かお客を驚かすようなものひとつも家へ飾りたいという方でしょう。でネー、お値段が安すぎるとマア品の格まで下げてお考えになりますんでネ。やはりキチツとして立派なお値柄で差し上げないと、お持ちになつていてももしかすると偽物じゃないかなんて落ち着かないお気持ちになられるようですよナ……」と洒々としたものである。

つまり、何となく落ち着かせるために高いお値柄にしておいて下さるといふ仕組みである。ある時店へ警官が来て、何か、しきりに聞き取つてゐる。後で聞くとちよつとした油断に貴金属製の何かを盗られたという話。「それはまあ大変な損害ですよ……」と慰める。主人依然として明るく笑つて、「よくあることなんです。何か売れそうなものに乗つて穴埋めしますからいいんですよ……」。

居合わせたお客、みんな不安な顔つきで、もう乗つけられたように浮かない苦笑をしている。主客ともに暮らしに困らないもんだけですからねと、さとのより外はない。

〔仏教書道〕、昭和四十一年

赤松子神農時雨師煉神服氣能人水不濡人
火不熯人火不熯至崑崙山常止西
王母石室中隨風雨上下炎帝少女
追之亦得仙俱去高辛時爲雨師問
遊人間

赤松子神農時雨師煉神服氣能人

水不濡人火不熯至崑崙山常止西

王母石室中隨風雨上下炎帝少女

追之亦得仙俱去高辛時爲雨師問

遊人間

(列仙傳)

(昭和四十一年)